

文系大学生に対する情報教育の試み

プール学院大学 国際文化学部 加藤源太郎

gkato@poole.ac.jp

1. はじめに

プール学院大学は、それまでのプール学院短期大学秘書科を短期大学部として残し、英文科を改組する形で 1996 年に国際文化学部の一学部で開学したばかりの新しい大学である。近年の国際化、多文化化、情報化の流れを受けて 2004 年にカリキュラムを変更し、英語文化専攻、異文化間協働専攻、情報文化専攻というコースを設置した。情報文化専攻では、コンピュータの知識や技術を習得するだけでなく、「情報を活用するリテラシー」を身につけることや情報の価値を読み解く判断力を身につけることに主眼が置かれ、「情報コミュニケーション」というキャッチフレーズをのものと、情報社会に広く通用する人材の育成を目的としている。

報告者は、社会学を専攻し、科学技術と社会の関係を社会的に考察する科学社会学と言われる領域を主な専門としており、情報工学や情報教育の専門家ではないが、情報文化専攻の教員として 2004 年度に採用され、情報関連科目の講義を担当している。

本報告では、情報関連科目における教育実践を報告するとともに、文系大学生に対する情報教育の可能性や課題を考える契機としたい。

2. 学生の知識と関心

1 年次に開講されている「情報演習 1」の授業内で、コンピュータの使用頻度や自宅での利用状況、知識などを調査するために行ったアンケート調査¹では、コンピュータを使うのは、「高校などの授業で使う程度」または「ほとんど触ったことがない」と回答した学生が半数以上を占め、「ほとんど毎日使用している」と回答した学生はわずか 3 名であった。また、パソコンのメールで添付ファイルを送信する方法を知っているか、という質問に「はい」と回答した学生も 3 名であった。

A パソコンをどのくらい使っていますか	
ほとんど毎日使っている	6.5%
週に 2～3 回	13.0%
月に 4～5 回	13.0%
高校などの授業で使う程度	37.0%
月に 1～2 回	10.9%
ほとんど触ったことがない	19.6%

B 今住んでいる家にパソコンがありますか	
ある	73.9%
ない	21.7%
無回答	4.3%

C パソコンのメールで添付ファイルを送信する方法を知っていますか	
知っている	6.5%
知らない	82.6%
無回答	10.9%

「大学の情報の授業でしてほしいことはどんなことですか」という質問をし、自由に記述してもらった回答からは、基礎的なことから、就職して困らない程度、といった意見に加えて、インターネット、ワード、エクセル、といった記述が目についた。多くの学生は、コンピュータの操作技術が自分の将来にとって重要であることに加えて、ワードやエクセルといった特定のアプリケーションが社会において重要視されていることも認知していると思われる。

1 年次後期より専攻に分かれて基礎演習を行う関係から、すでに 1 年生に対して各専攻のガイダンスを行った。情報文化専攻では、コンピュータの操作技術に偏重しない情報教育をねらいとしているので、その点を強調した。具体的には、情報の検索と取り込み、加工と分析、公開と発信という 3 つに情報を扱うフェーズを分割し、客観的情報や主観的情報の違いや情報発信時におけるバリアフリーなどについての説明をした。学生の反応が一番よかったのは、趣味や嗜好のアンケートと商品ブランドの記号的差異についての分析を組

み合わせて、商品コンサルティングとマーケティングを行っている EP-engine² という会社の例を取り上げ、情報の加工と分析について平易に説明したところであった。取り込んだ情報をすでに持っている情報と組み合わせることで新しい情報を創出するという、社会ではごく当たり前に行われていることも、情報 = コンピュータととらえていた 1 年生にとっては新鮮であったように思われる。

3. 教員の取り組み

本学部の専任教員 28 名のうち情報文化専攻の所属は 4 名で、それぞれの専門は、CALL³の開発などに携わってきたマルチメディア利用実践の専門家のほかには、文化人類学、社会心理学、そして社会学（報告者）である。今後、企業で経営情報を扱ってきた人材などを補充する予定ではあるが、現時点ではこの 4 名と情報演習を担当している非常勤講師 1 名で対応している。

すでに述べたとおり、本専攻では情報機器の操作技術に偏重しない情報教育を目的としてはいるが、内容は具体化されていないのが現状である。その原因の一つには、「情報」という概念がいくつかの意味で区別なく使われているということである。大雑把に分けて（1）いわゆる情報工学に属するコンピュータ技術と通信ネットワーク、（2）生命現象や物質の情報を自然科学的手法によって抽出する内容を情報として扱う生命情報などの分野、（3）生命体、特に人間によるコミュニケーションを目的とした表現や表現行動を対象とする分野、などが挙げられる。このうち、文系大学生に対する情報教育は、1 と 3 の領域が不完全な形で混交している場合が多いように思われる。また、1 は 3 の現代的なバージョンであるという見方も可能であり、この境界はきわめて曖昧だと言えるだろう。

1 が技術開発やユーザーなど社会との界面に生じる具体的な問題を射程に入れている一方で、3 は情報技術の進展による社会の軋轢や制度不全をより広い視野から分析する。これらの問題圏は非常に近接しているが、関連付けられたアプローチは極めて少ない。本学の情報教育においては、この両者に目を向け、その中間で情報と接することができる人材を育成しなければならない、というコンセンサスは取れているが、こと具体的な教育内容となると二分化してしまいがちであり、はっきりとした方向性を提示することができないでいる。

4. 今後の課題

上記 3 のアプローチは、文化論的なアプローチであり、他専攻の授業とも少なからず関連しているし、専攻の教員もこちらのアプローチのほうが得意な領域である。本学で採り入れようとしている、情報化社会への参画を念頭に置いた情報教育における文化論的なアプローチは、いわゆるメディア論とも区別する必要がある。したがって、コンピュータを介した情報のやりとりに特徴的な問題を文化論的に抽出し、検討するといったことも重要な課題となるだろう。

「情報」という概念はかなり錯綜し、混乱している。人文社会系の学部ならではの特徴的な情報教育を打ち出していくためには、まずこの概念を整理する必要がある。そして、「情報」に対する態度を明確にする必要もあるだろう。このように、困難な課題をひとつずつクリアしていかなければならないどころか、この新しい試みがどこへ着地できるのかも予想できない。しかしながら、同時に、情報教育における新しいニッチを拓くかもしれないという希望も感じている。この希望を胸に、引き続き実践し検討していきたい。

¹ このアンケート調査は、情報演習 1 を履修している学生 270 名のうち、報告者が担当しているクラス（10 クラス中 2 クラス）で実施した。回答者数は 46 名で、そのうち 9 名が留学生（中国 8、韓国 1）であった。

² EP-engine については <http://www.ep-engine.co.jp>などを参照されたい。

³ Computer-Assisted Language Learning の略で、大まかに言えば情報機器を使用した外国語学習のこと。